

長野県における 絶滅危惧植物の調査研究

信州貴重植物研究グループ
代表 今井建樹

まえがき

生物種の保全は現在国の内外を問わず地球的な課題となっている。しかし最近の各種開発や山草ブームの影響によって自然は破壊され、絶滅を危惧される種は極めて多く、深刻な状況におかれている。

長野県には2,700～3,000種の高等植物が分布している。本県はその地理的位置から見ても本州の中部に位置し、南限、北限、隔離分布等にあたる種も多く、さらに本州における3,000m級の山岳はここに集中し、稀産種とともに、豊富な植物相を形成している。

最近、日本自然保護協会等より「我が国における保護上重要な植物種の現状(レッドデータブック)」が出版され、本研究グループからもその資料は提供されているが、長野県という日本列島の位置関係から見たとき不十分であり、また分布が本県から欠落しているものも多い。全国的尺度でなく、県独自の観点にたって、保護上重要な植物種のリストアップが必要である。またその分布を明らかにして、分布域の開発に歯止めをかけることも考えていかなければならない。しかし、ここで注意しなければならないことは、その分布を天下に公表することは絶滅を招く愚策ともなりかねない。従って、これらの種の保護上有効な手だてをどのように講じて絶滅を防止していくかが、緊急の課題であるとともに研究を要する問題でもある。それと同時に長野県の植物相の特徴は、日本列島の植物相、地球の歴史の変遷等の解明にも極めて重要な手掛かりとなるものである。

本研究はこうしたことを踏まえて、長野県における、絶滅危惧植物の現状を詳細に捉え、保護対策を検討し、保全のための社会的アピールを提言することを目的とする。

1. 長野県内の絶滅危惧種の情報収集とそのリストアップ

県内を12の地区に分けて責任分担し、植物研究者等からの情報も得てリストアップを行った。全体をA、B、2グループに分け、次のようにした。A、B合計80科201種。

Aグループ（合計32科69種）

- (1) 絶滅：野生状態ではどこにも見当たらなくなったもの（栽培条件では生存しているものを含む）。 8科10種
- (2) 絶滅寸前：人為の影響の如何にかかわらず、個体数が異常に減少し、放置すればやがて絶滅と推定されるもの。24科59種

Bグループ（合計48科132種）

- (1) 危険：絶滅に向かって進行しているとみなされる種。今すぐ絶滅という危機に瀕するということではないが、現状では確実に絶滅の方向に向かってしていると判断されるもの。 14科27種
- (2) 希少：特に絶滅を危惧されることはないが、もともと個体数の非常に少ない種類。現状維持が可能でインパクトは少ない。この中には特に南限、北限にあたる種、大陸と共通種など植物分布上貴重な存在であると思われるものを含む。 34科105種

今回のリストアップしたものは別紙のようである。今後さらに検討を重ねて修正を加えていく予定である。

2. 分布図

リストアップした全種について、5万分の1地形図の16分の1メッシュで分布点を入れる。この作業は長年の蓄積によって初めて完成されるものである。今後もずっと続けなければならない。スペースの関係で今回は図1~4にとどめ、そのうちの6種について、若干の解説をする。

(1) トラキチラン

現在のところ八ヶ岳山麓の標高凡そ1,700~1,900mの亜高山帯の針葉樹林下に3ヶ所の群集を確認している。本種は腐生ランで、葉緑素を持たず、腐植の多い所に稀にみられる。地表面はコケで覆われているような場所である。花期は8月下旬から9月下旬である。毎年同じ場所には決して生えない。

ヨーロッパ産のものでは、花茎を出すと地下の菌根茎の一部に原基を出して腐朽し、その原基は10年近くを経て、また花茎を出すとされている。

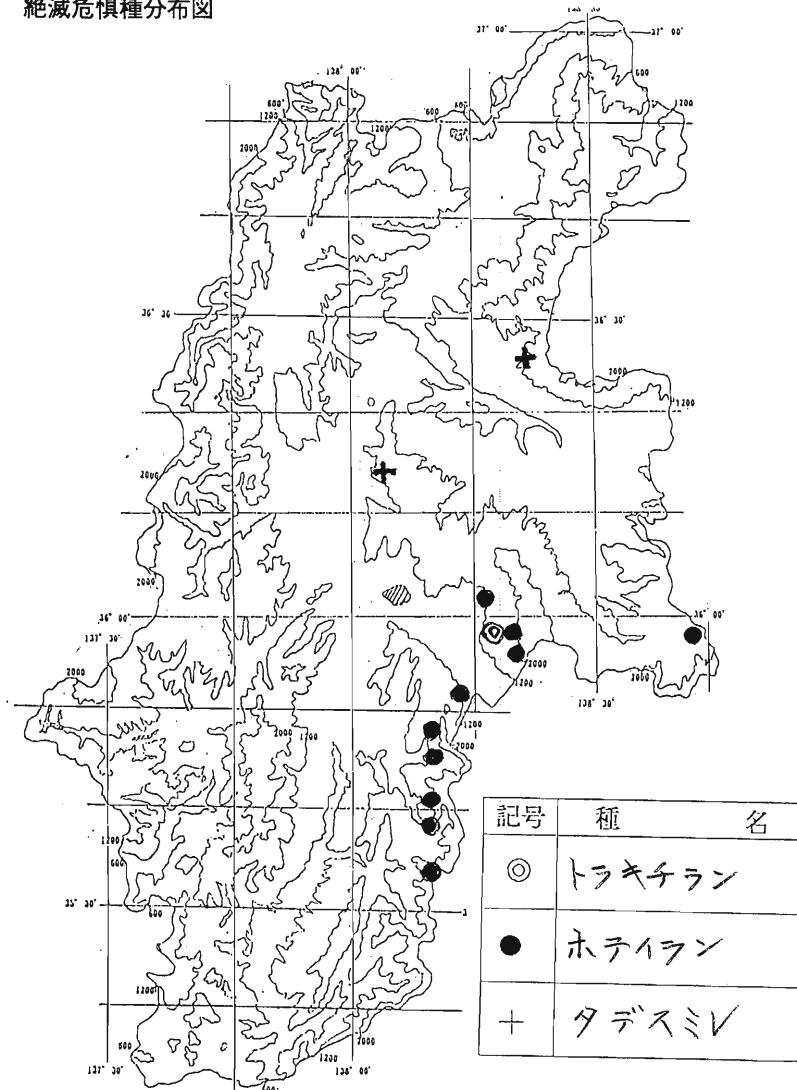
日本のものではその研究がないようである。我々の観察でもヨーロッパと同じような状態ではないかと思われる。果して何年かの周期で同じ場所に生じてくるだろうか、追跡的に観察を続けたい。ここ数年の観察ではすべて別の所から生え、年によって生ずる本数にも多少が見られる。

本種は1902年に日光の太郎山で神山虎吉氏が日本初の発見で、その名がついたようである。

(2) ホテイラン

八ヶ岳・南アルプス・秩父山地の標高1,300~1,800mの針葉樹林下に生える。葉は一葉で越冬性で、花が終わると枯れ、夏に出で、小型のまま越冬する。年によって花の多少が見られ、毎年必ずしも花をつけないようである。これも追跡調査をしたい。花は5月下旬から6月中旬に咲き、野生ラ

図-1 絶滅危惧種分布図



ンの中では最も美しい部類に入り、大変よく目立つので乱獲され絶滅寸前である。何とか保全対策を早急にたてる必要がある。

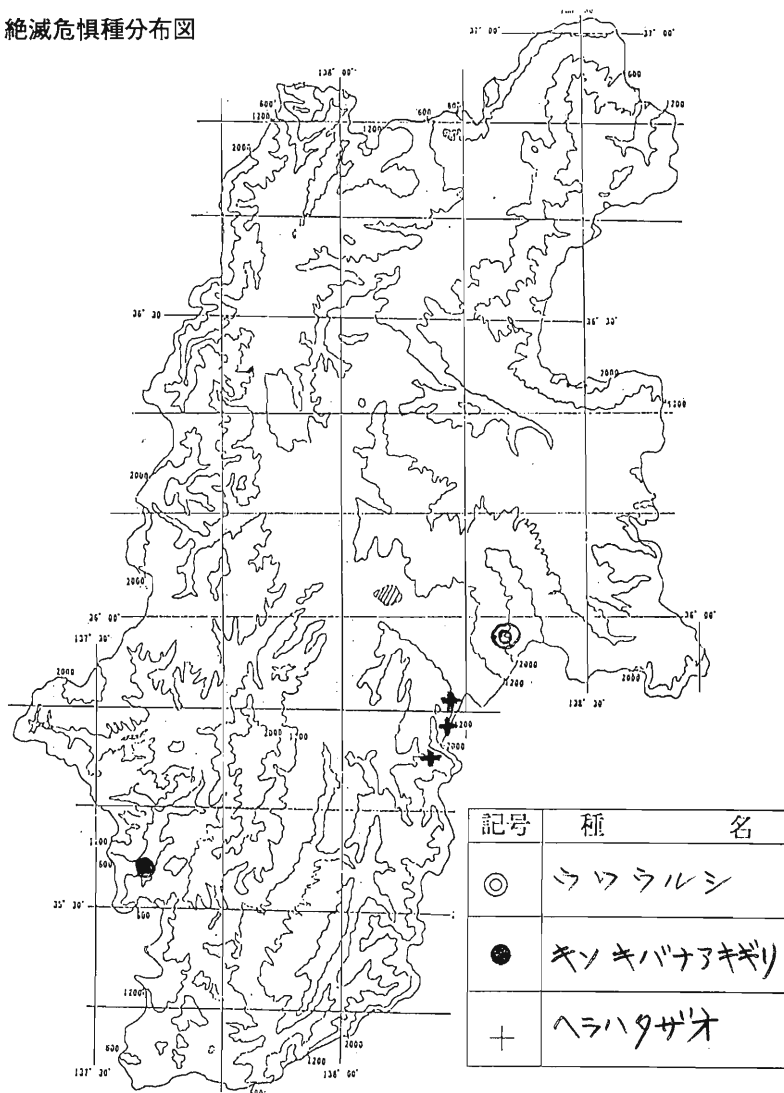
(3) タデスミレ

極めて稀な種で、日本全土に県内の2ヶ所しか知られていない。標高1,100~1,400mの多湿のカラマツ等の樹蔭に生える。花期は5月下旬~6月上旬である。極めて限られた場所で、しかもわずかに生えているに過ぎない。最近の山草ブームで減少し、絶滅寸前である。早急な保全対策が必要である。

(4) ウワウルシ

八ヶ岳で発見、日本では初の自生地である。本種はヨーロッパの極地方と、北米のロッキー山の低山帯に分布し、植物地理学上では氷河時代の遺

図-2 絶滅危惧種分布図



存植物として有名なもの。現在まで日本での自生は八ヶ岳の標高2,700mの1ヶ所だけである。日本のフロラに1種が加わることとなったものである。

(5) キソキバナアキギリ

長野県の本曾地方の南部の沢沿い標高500～700mの多湿地にキバナアキギリに大変よく似た植物が群生していることを発見。花期が6月中旬で、直立し、花をまばらにつけ、茎は多くは分岐することなく、単立し、花冠の付け根近くが大きくくびれることなどの相違点がある（キバナアキギリの花期は8月下旬～10月である）。そこでこれをキバナアキギリの変種として発表した。本県では2群集を確認しているが、その後隣接する岐阜県でも分布しているように聞いている。

(6) ヘラハタザオ

ハタザオ類で形態上どの種にも入らないもののあることに気づき調べてもらった結果、これは朝鮮半島に分布するヘラハタザオであることが判明した。標高1,000～1,500mの石灰岩地の林縁に生えている。これも日本のフロラにはなかったもので、1種が加わることとなった。朝鮮半島と日本中部との共通種で満鮮要素である。

これについては大井次三郎博士が1951年に採集された標本を基にトダイハタザオの名で新種とされて発表した。博士自信が1954年にこの見解を変えてエゾハタザオと同種であったとされた経緯のある植物である。従って別名トダイハタザオとなる。葉の形などからヘラハタザオの名が適切なものと考えられる。

3. 記録保存

絶滅が危惧される種については、その生態形態等克明に記録に留めるとともに、写真撮影による永久保存をしていきたい。仮に絶滅を招くようなことがあっても、将来に残せるよう考慮していきたい。今回はスペースの関係で、分布図にあるもののうち解説をした6種だけの写真を載せることとする。

あとがき

リストアップについては社会情勢などを考慮に入れ、また現状調査を深めて、更に検討を加えていきたい。またリストについても、更に多くの初見または新種の発見に務めていきたい。またマーキングによる追跡調査等によって、その生態、個体群の衰退の要因などを究明して、保全のための対策を社会的にアピールしていきたい。

長野県における絶滅危惧種

A グループ

(1) 絶滅 (extinct) : 略号 Ex

野生状態ではどこにも見当たらなくなったもの (栽培条件では生存しているものを含む)

◎単子葉類

オモダカ科…マルバオモダカ
ヒルムシロ科…コバノヒルムシロ

◎離弁花類

ナデシコ科…エゾセンノウ
スイレン科…ヒメコウホネ
アブラナ科…ハナハタザオ
スマレ科…タチスマレ

◎合弁花類

キク科…ヤマタバコ、フジバカマ、トガクシギク
サクラソウ科…カッコソウ

(2) 絶滅寸前 (endangered) : 略号 En

人為の影響の如何にかかわらず、個体数が異常に減少し、放置すればやがて絶滅すると推定される種

◎シダ植物

ミズニラ科…ミズニラ、ヒメミズニラ
シシラン科…イトシシラン
オシダ科…センジョウテンダ、ニオイシダ
ウラボシ科…キレハオオクボシダ、ウロコノキシノブ
デンジソウ科…デンジソウ
ヒカゲノカズラ科…ミズスギ

◎裸子植物

ヒノキ科…ミヤマビャクシン

◎単子葉類

ホロムイソウ科…ホロムイソウ
ミクリ科…ミクリ、ヤマトミクリ、ナガエミクリ
ヒルムシロ科…ツツイトモ、ホソバヒルムシロ
ミズアオイ科…ミズアオイ
イバラモ科…ヒメイバラモ
トチカガミ科…スブタ
ウキクサ科…ヒンジモ
ホシクサ科…クロイヌノヒゲモドキ、オオムラホシクサ
ユリ科…サクライソウ、ミカワバイケイソウ、コワニグチソウ、シライトソウ
ラン科…ナツエビネ、キソエビネ、ホテイラン、コアツモリ、クマガイソウ、ホテイアツモリソウ、アツモリソウ、キリガミネアサヒラン、トラキチラン、アオキラン、サギソウ、フガクスズムシ、クモイジガバチ、ムカゴサイシン、ウチョウラン、コハクラン、カヤラン、セッコク、イワチドリ、サルメンエビネ、ミスズラン

◎離弁花類

ナデシコ科…エンピセンノウ

スミレ科…タデスミレ

キンボウゲ科…カザグルマ、オキナグサ、イチヨウバイカモ、オオイチョウバイカモ

◎合弁花類

ツツジ科…ウワウルシ

ムラサキ科…ムラサキ、イワムラサキ

ゴマノハグサ科…イナゴメグサ

リンドウ科…イヌゼンブリ、ムラサキゼンブリ

B グループ

(1) 危険 (vulnerable) : 略号 V

絶滅に向かって進行しているとみなされる種。今すぐ絶滅という危機に瀕するということはないが、現状では確実に絶滅の方向に向かってしていると判断されるもの。

◎単子葉類

カヤツリグサ科…タルマイスゲ

ラン科…エビネ、キンセンラン、ベニシユスラン

◎離弁花類

ボタン科…ベニバナヤマシャクヤク、ケナシシロシャクヤク、ヤマシャクヤク

メギ科…トガクシショウマ (トガクシソウ)

スイレン科…ジュンサイ、コウホネ

ベンケイソウ科…ツメレンゲ

ユキノシタ科…タコノアシ、ヤシャビシャク

カエデ科…ハナノキ

バラ科…キンロバイ、ハクロバイ

アカバナ科…トダイアカバナ

◎合弁花類

サクラソウ科…クモイコザクラ、サクラソウ、シナノコザクラ、コイワザクラ、ハイハマボス

シソ科…シナノアキギリ、ムシヤリンドウ

ゴマノハグサ科…オオアブノメ

キク科…アイズヒメアザミ、ホクチアザミ

(2) 希少 (rare) : 略号 R

特に絶滅を危惧することはないが、もともと個体数の非常に少ない種類、現状維持が可能でインパクトは少ない。

◎シダ植物

ハナヤスリ科…ミヤマハナワラビ

オシダ科…ヤシャイノデ

イワデンダ科…キンモウワラビ

ウラボシ科…トヨグチウラボシ

◎裸子植物

マツ科…ヤツガタケトウヒ、ヒメマツハダ、ヒメバラモミ、アズサバラ

◎単子葉類

ミクリ科…ヒメミクリ

イネ科…ヒゲナガコメススキ、ミヤマハルガヤ、ヒロハヌマガヤ、タカネソモソモ、タチイチゴ
ゴツナギ、タニイチゴツナギ、ミヤマカニツリ

カヤツリグサ科…タカネシバスケ、センジョウスケ、ダケスケ、ホムロイクグ、マンシュウクロ
カワスケ、クグスケ、スジヌマハイリ、サヤスケ

サトイモ科…イナヒロハテンナンショウ、カミコウチテンナンショウ、ハリイキテンナンショウ

ホシクサ科…アズミイヌノヒゲ

イグサ科…エゾイトイ

ユリ科…シブツアサツキ、ヤマスカシユリ

アヤメ科…ヒメシャガ

ラン科…キバナノアツモリソウ、ハクウンラン、サカネラン、ニヨホウチドリ

◎離弁花類

カバノキ科…サクラバハンノキ、チチブミネバリ

イラクサ科…トキホコ

ナデシコ科…ナンブワチガイソウ、チシマツメクサ、タカネマンテマ、ミヤマツメクサ

キンボウゲ科…オンタケブシ、セツブンソウ、クモマキンボウゲ、タカネキンボウゲ、ヤツガタ
ケキンボウゲ、ノカラマツ、エンコウソウ、ミチノクフクジュソウ、フクジュソ
ウ、ミョウギカラマツ

アブラナ科…クモイハタザオ (クモイナズナ)、キタダケナズナ、トガクシナズナ、モイワナズナ、
シロウマイズナ、ヘラハタザオ (トダイハタザオ)

ユキノシタ科…マルバチャルメルソウ

バラ科…エゾサンザシ (クロミサンザシ)、マメナシ、カラフトイバラ、ハゴロモグサ

カタバミ科…オオヤマカタバミ

フウロソウ科…ビッチュウフウロ

セリ科…ヤマナシウマノミツバ

◎合弁花類

ツツジ科…ハコネコメツツジ、ヒメツルコケモモ、イワツツジ、キョウマルシャクナゲ

モクセイ科…ヒトツバタゴ

ミツガシワ科…アサザ

リンドウ科…シロウマリンドウ、アカイシリンドウ、サンブクリンドウ、チチブリンドウ、ヒナ
リンドウ、コヒナリンドウ、ヒメセンブリ、オノエリンドウ

シソ科…キノキバナアキギリ、ミゾコウジュ、エゾナミキソウ

ゴマノハグサ科…マルバノサワトウガラシ、キタダケトラノオ、コケコゴメグサ、イナサツキヒ
ナノウスツボ、オオヒキヨモギ

タヌキモ科…ミミカキグサ、ムラサキミミカキグサ、ホザキミミカキグサ

スイカズラ科…ツキヌキソウ、ハナヒョウタンボク、スルガヒョウタンボク

キキョウ科…シライワシャジン、ミョウギシャジン、イワシャジン

キク科…トダイハハコ、ハハコヨモギ、コマウスユキソウ、カワラウスユキソウ、イナトウヒレ
ン、オオイワインチン、イズハハコ



▲トラキチラン (ラン科)



▲タデスミレ (スミレ科)



▲ホテイラン (ラン科)



▲ ウワウルシ (ツツジ科)



▲ キツキバナアキギリ (シソ科)



▲ ヘラハタザオ (アブラナ科)